

プラス思考・マイナス思考

江戸時代のことです。

仲のよいA吉とB吉が二人連れ立って、江戸見物に出かけました。

江戸の町は見るもの聞くものみな珍しく、初めての旅を心ゆくまで楽しんだ二人は故郷へ帰ると、早速家族の者に江戸での珍しい土産話を聞かせたのです。

A吉「江戸の町は恐ろしい所じゃ。水一杯飲んでも金を取られる。油断も隙もあったもんじゃない」

B吉「江戸の町は面白い所じゃ。水一杯飲んでも金になる。さすが江戸の町じゃ」

二人の話を聞いた村の長老は、「B吉は世に出れば、きっと大成するだろう」と言ったというのです。

「水を買っている」という出来事を通して、A吉は「金を取られる」、B吉は「金になる」と思ったという話ですが、中々味わい深いものがあります。

私たちは、この話のように、同じことに出遭っても全く違った受け取り方をするものです。今風に言えば、A吉は「マイナス思考」、B吉は「プラス思考」ということになるでしょう。プラス思考は前向き、積極的、肯定的であるのに対して、マイナス思考は後ろ向き、消極的、否定的だとも言えます。

さてここで、お念仏の生き方を振り返ってみましょう。

親鸞聖人が35歳の時、念仏弾圧によって無実の罪で越後へと流罪に処せられた時、「これなお師教の恩致なり」とおっしゃっています。

流罪といえば死罪に次ぐ重い罪です。しかも言われなき罪です。そんな絶望の淵に立たされながらも、「これも一重にお師匠様のお陰だ」と受け止めておられるのです。

なぜ、そのように受け止められたのかと言いますと、それは、「大師聖人源空もし流刑に処せられたまはずは、我また配所に赴かんや。もしわれ配所に赴かずんば、何によってか辺鄙の群類を化せん」と考えられたからです。

つまり、「お師匠さんである法然上人がもし流罪にならなければ、私も越後のような辺鄙なところに流されることはなかったであろう。そうなればその地の人々にお念仏のみ教えを伝えることなどは到底出来なかつたはずだ。しかし今こうして流罪に遭うことによって、そんな辺鄙な地に住んでいる人々にも、お念仏のみ教えを伝えることが出来る。生きる喜びの灯をともしあげることが出来る」ということなのです。

このように、流罪という人生最大の不幸ごとをお念仏のみ教えを伝える大事なご縁だと、前向きに受け止めていくことによって、その苦難を乗り越えられたのです。

親鸞聖人は「我が人生に起こるあらゆる出来事は、お念仏を喜ぶかけがえのないご縁だ」と仰っておられます。

さらにまた、妙好人として名高い足利源左さんは、いつも「ようこそ、ようこそ、南無阿彌陀仏」と過ごされたと聞きます。

それは「私の人生に何が来てもかまいません。そのすべてがお念仏を喜ぶこよなきご縁です」と何事も前向きに肯定的に受け止めていかれました。

こうしてみますと、お念仏のみ教えはまさに究極のプラス思考なのです。

思えば、私たちの人生はお釈迦様が仰られたように苦悩の人生です。

その苦悩の人生の中にあって、一切の出来事を前向きに、肯定的に受け止めていく念仏者の生き方こそ、いかなる苦難も喜びに転じていくたくましい人生を歩むことができるのです。

平成17年12月 「光明寺だより43号」より